

(A01-3) 骨格筋の発達・維持萎縮における深依存性の分子基盤の理解

連携研究者：特定助教 佐藤文規

所属：京都大学 ウイルス・再生医科学研究所

派遣期間：平成 30 年 12 月 4 日～平成 30 年 12 月 14 日

新学術領域研究「宇宙に生きる」国際共同研究加速基金よりご支援いただき、米国・ネバダ大学リノ校 Peter Jones 研究室・平向陽介博士と共同研究に関する打ち合わせ及び米国・サンディエゴで開催された American Society for Cell Biology (ASCB) において本研究プロジェクトに関する発表を行ってききましたので報告いたします。

・ネバダ大学リノ校 Peter Jones 研究室（12 月 5 日～12 月 6 日）

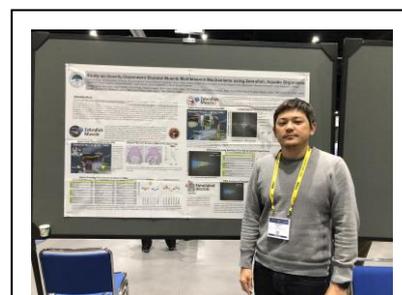
平向陽介博士は京都大学・再生医科学研究所（瀬原研）で学位を取得後、Fred Hutchinson Cancer Research Center, Stephen Tapscott 研究室に移られ、顔面肩甲上腕型筋ジストロフィー（facioscapulohumeral muscular dystrophy：FSHD）に関する研究を開始され、現所属のネバダ大学・Peter Jones 研究室においても FSHD の治療法開発を最終目的とした研究を続けておられます。今回の訪問では、進行中の「幹細胞のイメージングプロジェクト」に関する打ち合わせだけでなく、基礎研究を前臨床試験へ発展させる過程についてのディスカッションを行ってききました。その中で、疾患モデル作製の重要性について、「“似ている”ではなくて“同じ”でなければならない。」と言っていたことが強く印象に残っています。この点は宇宙研究に関しても同じだと思います。宇宙滞在における骨格筋萎縮に関しては尾部懸垂マウスがモデルとして使用されることが多いですが、より宇宙滞在に近い“宇宙滞在モデル”の開発は必須の課題です。これによって治療方法および治療薬の開発が加速的に進むことは明らかであり、改めてその重要性を認識させられました。



ネバダ大学リノ校
Center for Molecular Medicine
右：平向陽介博士

・ASCB（12 月 8 日～12 月 12 日）

ASCB は年に 1 度米国で開催される大変大きな学会で、生物学における多種多様な分野の研究者で構成される学会です。宇宙開発が進んでいる米国で、様々な研究分野の研究者から意見をいただきたいと考え参加しました。宇宙開発先進国である米国では、日本と比較して宇宙を身近なものと感じられているようで、質問は非常に鋭いものがあり、貴重な意見を得ることができました。



ポスター発表@ASCB